





金糸組  
たげ  
しん

福徳過報嘲卷之四

増山九中

何れもこの好まぬものなればさるるひ  
のしこち中ふといふやの身のだくは物象  
て長吐し盤上とくまて毒ハむららそのお  
みといはれくの植好物ハあまても急なは角  
まゝなる思ふのかせふおひほくかけあひ  
あり。大坂立賣地をふふ富屋立仙く余  
能くをう遠老ありらるがほくか好く子好ふ

三間屋のむれ一の例もへはく裸はらふあり  
首だ若海へといつと長いさやてはる急病れる  
ふ合と堂のうら宿ふの縁は好ふはくもさ  
かくあをた終ふたの事と後ふの何方へゆれ  
しやゆらうさくぬふりう宿ふ西玉方御大者  
神松の水を悟ふ文治といふ人毎年長崎の  
川只も年つては番百み孫人の内ゆく勅書ふ  
はめらぶがと耐らハ唐人とわらんだも所屋ふ  
て日本人もも女くはると合らぶがひ文治ふ

と導門或唐人みありし。腔くわう胎之海くとも孫  
て名人といふ孫あそちりふら。津番とすそそ  
ゆえへかへりゆめれ津番の内勿事なとけん  
そとをはせ。相とと二(海へ)あげそとあがゆを  
もあ孫ハゆくぬる陸へといふよりけがなをま  
さるは事むはうそく女まは文治大坂へみけ  
のやとあそとたのんで居たりしう浪人のさ  
るまばんまなく志のたといふと中の端を  
あまの老成たのそ大坂小規川こういをたれうそ

とうりひんごり身あくるくもたがたいあやう  
 うしはまりなまふあつくあ髪して増した申  
 と名残のつためをふの志やくとらはくせんを  
 さらすく身滅治をいれくまふ業紀  
 なるりとの海人でもなれぬいふおのものが  
 けくあまかせ書方よりけん海をんづらまよの  
 ちやうらくしやく夜のつらと九つまふお居まへ  
 かつふ毎夜百廻武百廻寝つてまふけくいふつ  
 ふよあさびくくくまふがた申むらう大ぬまふ

く穢のむ時はんやすと老をよせくうぶいふ  
 た申がむられうらやみかほくしふ華のさしあ  
 たりかこく懐申お穢令のけうららへおあを  
 かとた海くかておその穢うのけうららへおあ  
 けりふよほくた申くひいふとあうがのふとあ  
 だ名とけけおあてさし海との養親とといふ令  
 穢うあまびくくまふいはもえのまふおてあ  
 うのあまると氣の毒さふをふのものけうあ  
 と悟りあまふといふた申と氣成さうを穢

して。何れもたうは不天海所の何れもたうは  
まことれつるもしとちく何れもたうは  
家より何んまたの海をよこふにゆくた中  
内へ入ふ番頭らつたも代やん比の中候と出  
まこと標をいつまことせり。脈とカクたれハ  
疾の目ぞぞづると云て此のま中ううお中  
あ服ぐうあはむびのせんそこのころはと  
屋よりおんまごばんよく藤入らふた中えのま  
おれも代へ何れもたうは月のまあふまごく縁さ

せく前代よりいつかの子代と云ふもつとを  
むけが唐人の巻傳るもいふかめふ事かざるとは  
番頭目と云ふしてさてもく是もぞ多くは  
此の道りやうじふかり海したるま方のやみなり  
沖名人ふ出合海した事ハあざう海せぬ。賢人と  
海り海りたいうふもよくあふまことだがその晩  
とほ出りまふ海せとくれぐたのこも月哉百羽  
張ふはくしゆしゆと又の晩海いつまことよ  
あつたの道りあつたのやみなよまたんよあま

も何の事かといふ人しむるは清内殿様のお  
 しくせられたるのあはれはかたよなされたが  
 ばなみくもさきかといふたうぞ何すのぞんを  
 何んまどのがえへたつたのをかき納指る。次  
 の夜た中やくさくのさかりはひつてくさ  
 より何げくといふはさかりはさかりは申のる  
 へ通とせねおむらひらめくのあはれとて  
 批若う妻去冬より工務候はよく後かみある  
 はよめるんだいといふと申ゆき申で清内殿様

のちつともいふとてさびるもすれどもかぐ  
 ありやるともた申さく先は胸をうかひま  
 ちよとて内候の指回くさかり極成んく是ハ  
 結氣くくきしむらぶがでさびるはつとて  
 いたしてきんかきさきくといふとみや  
 げ今候はかき清内殿様おませみ今つあなも  
 やうじなうといふはさきくといふはさきく  
 内殿様もさきくはさきくといふはさきく  
 信びまかり中の間へおき清内殿様とお清酒

きども出候をかくさる内ふとしきぬに因事  
ていぬく奥へゆ。番頭等々ハ何れも堂の  
内より出下さしとしきた申小登みく世の  
浪人の事ゆ(衣服見らる)く白言ふはまじ  
がたしとしふたの後ハある中もはつますい  
た申ヤハしきいしきいしきいしきいしきい  
尸と氣の毒とせしきいしきいしきいしきい  
尸ハは室ハ何れいふうなるいしきいしきい  
あはらと具者いしきいしきいしきいしきい

だんぞいしきいしきいしきいしきいしきい  
よ代男とせしきいしきいしきいしきいしきい  
袖こつね織帯小服指しきいしきいしきいしきい  
はうらと。た申しきいしきいしきいしきいしきい  
つとまじきいしきいしきいしきいしきいしきい  
ハ去るよりしきいしきいしきいしきいしきい  
海して森内とせしきいしきいしきいしきいしきい  
た申ゆき今つたなるしきいしきいしきいしきい  
とく使のよめハはらしたかしきいしきいしきい





さいふた申入あかしくまらぬうとして使をさるふ  
 はきく見おつるあしふらうしあはげめ番頭  
 とさむくいぬくちをりして二三かけ方にた  
 たうらうきつとさうも氣をほまひしてま  
 るふうらたれとらお物あつぬ先酌をとて  
 かつらるが番頭うまくとさむぐとぬかぬ  
 ぬらぬあ後十又あつるあしむらぬぬと  
 さいふさうさうし合ふよとさみささるさ  
 さいふ白銀二枚持者といふと番頭れぬ

さいふと申入は方のうらふ小座あうらうと  
 海とさいふのたぬくさつまはは白銀さう  
 さいふいふ海さいふとさせぬかのあうがの子乃  
 さいふいふせいふとさいふの月入れとさいふ  
 さいふがうはといふ大座がのうらぬ極小座  
 さいふさうさいふをさいふの老とさいふして面  
 向不背れさいふといふさいふとさうさう相違や  
 さいふのさいふめさうさいふといふさいふとさう  
 さいふのさいふのさいふのさいふのさいふと

後身とありぬわして新花院とやらも觸頭  
 へと申おすも。意神をいひふと何れか出入の  
 屋したかると立今く梅子よくくりりまら  
 御膳と梅かよびふ来く書院の縁がうと  
 通くら新花院平休して市り内は庭の梅  
 の本乃枝小葉うとすゆくと市り新花院見て是  
 へて心付市り。殿様出志いくといふうら 席ふ  
 志たるまき坊と能もて梅夜あま成らんこハ  
 との由定新花院夜あのみさるはるでこぎりと

ませふといふ是ハあ妙く響せ見たとの由定を  
 新花院志ぐくかんぐ大坂ての吉きよ何らあ若  
 かきひ。本と出志くゆびとあつ御いさふ旅く  
 何吉きよぐいさうませめていさそくよ坊はわ  
 猪もて酒ぐもくまよこて出入きまきバを智  
 と用い申ととらとちく吸物酒下まき村のか  
 何ははるまきく先當分の由やうし建報成取  
 ちつて新花院と候びあつとくうま後には  
 ありあ花脚あましく何嬌子梅法大後小きり

付与大殿の収去かかると新嘉院へ銀も及又  
 く事なる然きてもおびくし死事ハは銀も若  
 小なるも亦たひとしむ事ひをたうして益  
 宿小指どもさふさふと指の福もさふさふ我  
 宿の乃とわささ。うはさるし夜明し分といふや  
 るる形もさふさふ私に宿の是でござらうと海は家  
 先と昔のさふさふお宿の積を起してやさし  
 又減さのさふさふと新嘉院の只さふさふと  
 じつとさふさふさふさふと本番九でものをせま

分夏中さかいあうする蛙のほくへあでも一  
 桶汲く来て葉でものをせさく進せささやさ  
 とお借屋の鳴きまがまはやくとの内ふ葉櫃か  
 かりとさふさふさふさふさふさふさふさふさ  
 と陽枝とさふさふさふさふさふさふさふさ  
 ぶささふさふさふさふさふさふさふさふさ  
 海さふさふさふさふさふさふさふさふさ  
 中ふ積はさふさふさ唐人お借の身ハあくと  
 叶ハさふさふさお果ささバ法倫味味乃々たたと

身軽志ましく古きとらむと奇へとしつぐ  
 吊ひらふまうりとの私乃め希き清と又く  
 たのびくうくをかつてあまもんべんを  
 のうまじしくくつらるが中の清ふ西風  
 去はたきの花を友の侍ふは茶田某といふ人仲風  
 めくま身かきりど百日余りあもちりくがいろ  
 く瘡治せはくく出入のとのたがた中が  
 幸せ中れはたうどたのとなつてあまもんべん方く  
 くまゆをかりてあまもんべんはり唐人ふ西風

の厚しなまじバ肝の清の程よくなりく七月  
 正片身の志びもあつた清ふは後夜さきん  
 不意なしたれおとあまもんべんがば幸あえへ  
 中へ西風清みく御園の御院居極より大坂花  
 屋敷のあまもんべん中へ後夜あまもんべん  
 明ふあまもんべん中へこの清ふはあまもんべん  
 舟のせくあまもんべんあまもんべんあまもんべん  
 志くとの清むはたれおとあまもんべん御院居極へ  
 中へ西風清みく御園の御院居極より大坂花

と二三年来たり中風りたりし事自中がかるふ  
極ふるり世りたりありありと此年後をま  
るり神皇の興業荒れぬ事妙なる療治ありと  
肝をほろくする神限者といへり上下れは  
かたりありとてその事ふは神物の由志やと  
てありしにたりとてその事ありと何がは水神  
におりて根子おはしむいふに懐中かたりあり  
ぬ事まはるへのがりかのお助ふありしたると思  
ふるるか化事ありとされどもた中り見へ根バ

坊をくおむむをへたふたつすとはんや  
とて夜ハ九ツハワすくたきありといて森  
さかふつと縁じたりとてはまもあつて年  
ごかりたりとての内は水神かびりねありと  
ありと根子とて七月のつとくた中めん屋あり  
ありといはる海よりあり有馬へ湯治たりたりと  
影ふたふ縁ふは湯治いふ毎に大坂への  
がらありといふとてその事ありとて  
又命書ありとてたの事ありとて

枝りの事をなめをたしとみあへて若いもの  
あなま死へんことをたのむ事とかくた申い  
たがわらうのりもさくをてハ裸ふるの程ふ五  
ふくわづこころした申う勝たうとの救金  
のありの内いへをすけたらばめあふるく入遊  
せよこのそくひを樂へことたそくした申う  
ゆるといたぎきこのあつとふ何あふあふふ  
してふ自由のちかやあふくもあふくもくちさ  
せあふんた申うあへ押あせかのやふあとの相子

ふありの勝てふ事清かへて感とといふ事なく  
あはれあとのあふまたとくあふ情のたれた事た  
へ。さうらした申うと目がかまてやあといふ子  
身とさふくあふさバ自然とくは事やとれがま  
わらうとあふとあふとあふとあふとあふと  
あふあふとあふとのはせいたくあふとあふとあふ  
万能うう一ふう大事えはうらといふ病のあは  
苦勞いたくあう老待とく樂とあふとあふ  
酒徳過報喇卷之四終

